

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

令和3年度（2021年度）発生予報第8号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和3年度（2021年度）病害虫発生予報第8号（11月予報）

I 気象予報：令和3年（2021年）10月28日福岡管区气象台発表

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	30	40	30
	降水量	30	40	30
	日照時間	30	40	30

II 【今後、注意すべき病害虫】

1 発生の概要

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
チャ	カンザワハダニ	やや多	やや多	並(±)	並(±)	気温並(±) 降水並(±)	茶研予察ほ 御船町 多 (+)
カン キツ	ミカンハダニ	多	多	多(+)	やや多～並 (+)	気温並(±) 降水並(±)	果樹研予察ほ 宇城市 並 (±)
冬春 トマト	黄化葉巻病	多	多	黄化葉巻病 多(+) コナジラミ 多(+)	多～並 (+)	(コナジラミ) 気温並(±)	
	すすかび病	やや少	並	やや少(-)	並(±)	気温並(±) 降水並(±)	



作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
冬春ナス	すすかび病	並	並	並(±)	並～やや少(-)	気温並(±) 降水並(±)	
ウリ科野菜	退緑黄化病	並	並	—	キュウリ並 メロン並(±)	(コナジラミ) 気温並(±)	メロン発病株率調査並(±)
イチゴ	うどんこ病	やや少	並	並(±)	並(±)	降水並(±)	
	ハダニ類	やや多	並	やや多(+)	やや多～並(±)	気温並(±)	
冬春果菜類	コナジラミ類	多	多	トマト多(+) ナスやや多(+)	ナスやや多(+) トマト多～並(+) キュウリやや多(+) メロンやや多～並(±)	気温並(±)	
	アザミウマ類	やや少	並	ナスやや少(-)	ナスやや多～並(±) キュウリ並(±) メロン並～やや少(±)	気温並(±)	



作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
野菜類 全般	ハスモンヨトウ	やや多	やや多	イチゴ 多(+) ナス 並(±) トマト 並(±)	イチゴ 多～やや多 (+) ナス やや多～並 (±) トマト やや多～並 (±)	気温並(±) 降水並(±)	フェロモン トラップ調査 合志市 並 八代市 並 山都町 並 阿蘇市 一の宮 並 波野 多 (±)

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。

2 予想発生量、根拠、対策等

◎チャ

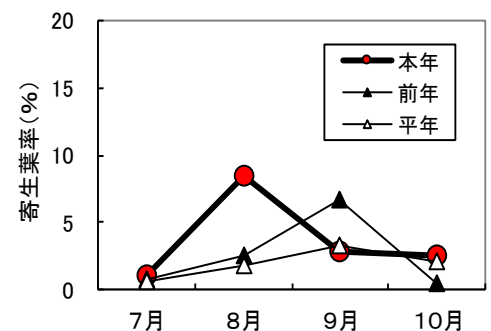
1) カンザワハダニ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 10月の巡回調査では、寄生葉率 2.5% (平年 2.1%) で、平年並の発生であった(±)。

イ 茶業研究所(御船町)の10月第4半旬の調査では、寄生葉率 40.0% (平年 4.0%) で、平年比多であった(+)

(3) 対策 ア 越冬を始める11月上中旬に園地をよく観察し、発生が認められる場合は直ちに防除する。なお、赤焼病常発園ではダニ剤を、それ以外の園地ではマシン油乳剤を選択し、樹冠深層部やすそ部にもむらなく薬液が付着するよう規定の散布量で丁寧に散布する。



◎カンキツ

1) ミカンハダニ

(1) 発生量：多

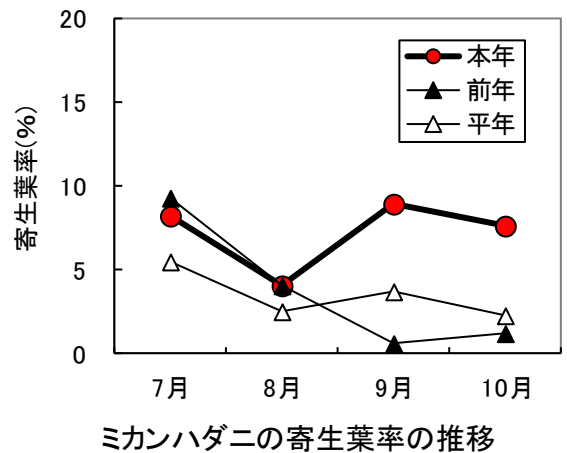
(2) 根拠 ア 10月の巡回調査では、一部圃場で多発が確認され、雌成虫の寄生葉率7.7%（平年2.4%）、寄生頭数3.6頭/10葉（平年0.5頭/10葉）と平年比多の発生であった（+）。

イ 果樹研究所（宇城市）の予察ほ場調査では、10月第4半旬の寄生葉率は7.0%（平年5.1%）で平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 収穫前防除を徹底する。収穫時にミカンハダニが寄生している場合、出荷果実への混入や、収穫後に増殖し被害を及ぼすことがあるため、収穫期間近に発生が確認されたら薬剤防除を行う。特に、不知火等の収穫後貯蔵する品種では発生に注意する。

イ 収穫期間近に薬剤を散布する場合には、薬剤の使用時期に注意する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎冬春トマト

1) 黄化葉巻病

(1) 発生量：多

(2) 根拠 ア 10月の巡回調査では、発病株率3.9%（平年0.8%）で平年比多の発生であった（±）。

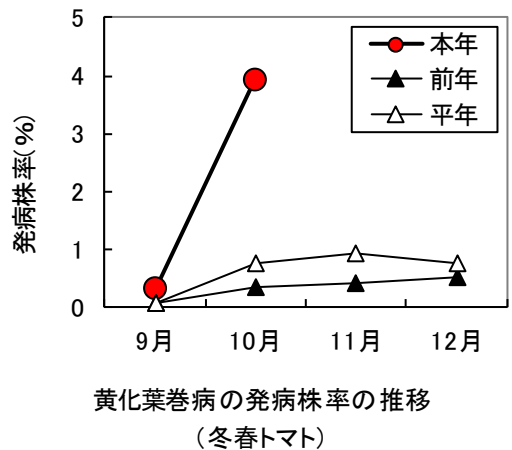
イ 10月の巡回調査では、コナジラミ類の寄生葉率7.7%（平年0.9%）で平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア タバココナジラミを施設内に入れない対策を徹底する（3 防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

イ 施設内外の雑草は、タバココナジラミの重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、タバココナジラミの早期発見に努める。

エ その他、防除の詳細について令和3年10月27日付け発生予察注意報第3号も参考にする (<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/R3/yosatu/211027tyui.pdf>)。



2) すずかび病

(1) 発生量：やや少

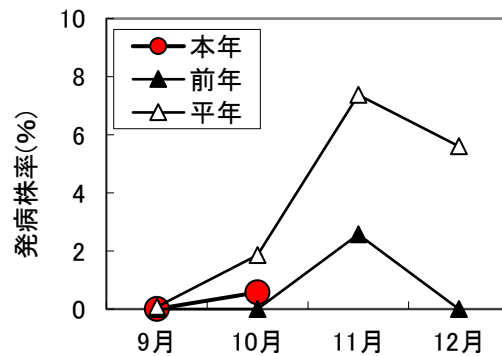
(2) 根拠 ア 10月の巡回調査では、発病株率0.6% (平年1.9%) で平年比やや少の発生であった(ー)。

(3) 対策 ア 過度のかん水を避けるとともに、保温や換気を十分に行い、施設内の過湿防止に努める。

イ 多発生すると防除が困難なため、発生初期に防除を徹底する。

ウ 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



すずかび病の発病株率の推移
(冬春トマト)

◎冬春ナス

1) すずかび病

(1) 発生量：並

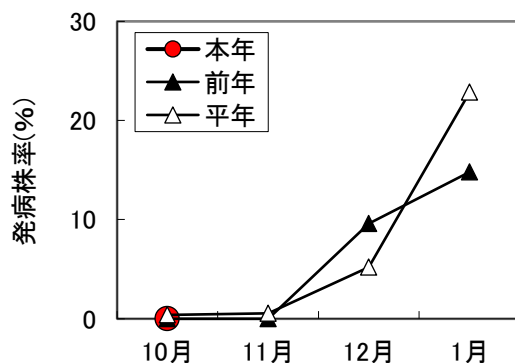
(2) 根拠 ア 10月の巡回調査では、発病株は確認されず(発病株率平年0.4%)で平年並の発生であった(±)。

(3) 対策 ア 過度のかん水を避けるとともに、保温や換気を十分に行い、施設内の過湿防止に努める。

イ 多発生すると防除が困難なため、発生初期に防除を徹底する。

ウ 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



すずかび病の発病株率の推移
(冬春ナス)



◎ウリ科野菜

1) 退緑黄化病

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 10月の防除員報告では、キュウリでやや多、メロンでやや多～並の発生であった(+)。

イ 8月上旬～9月上旬に屋外で採集したタバココナジラミのウリ類退緑黄化ウイルス(CCYV)保毒率は、平年比やや少であった(-)。詳細は、令和3年9月24日付け発生予察技術情報第8号(http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/R3/yosatu/210924gi_jyutu.pdf)を参照する。

ウ 10月に実施したメロン現地ほ場の退緑黄化病発病調査では、発病株率14.1%(平年19.6%)で平年並の発生であった(±)

(3) 対策 ア タバココナジラミを施設内に入れない対策を徹底する(3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照)。

イ 施設内外の雑草は、タバココナジラミの重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、タバココナジラミの早期発見に努める。

◎イチゴ

1) うどんこ病

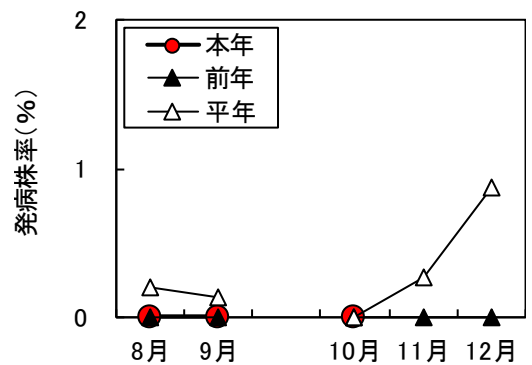
(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 10月の巡回調査では、発病株は確認されず(発病株率平年0.0%)、平年並の発生であった(±)。

(3) 対策 ア 開花期までの防除に重点を置く。

イ 薬剤防除では葉裏に十分かかるように散布する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



うどんこ病の発病株率の推移(イチゴ)

(8-9月:育苗ほ 10-12月:本ほ)



2) ハダニ類

(1) 発生量：やや多

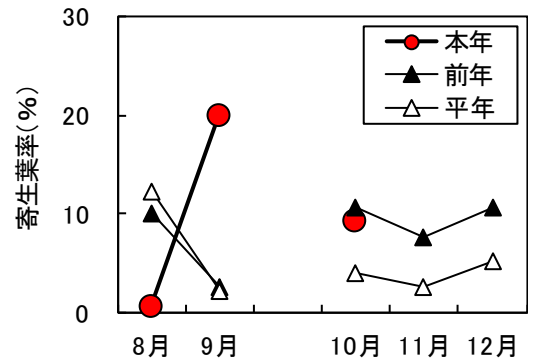
(2) 根拠 ア 10月の巡回調査では、寄生葉率9.3% (平年4.0%) で平年比やや多の発生であった(+)。

(3) 対策 ア ハダニ類は下葉の裏に多く寄生しているため、老化葉は積極的に除去する。除去した葉は、施設外に持ち出し適正に処分する。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期に防除を徹底する。

ウ 収穫や管理作業の際に発生を確認した箇所には目印を付け、気門封鎖剤等で防除を行い、その後の発生を注視する。

エ 天敵(チリカブリダニ、ミヤコカブリダニ)を放飼する場合は、天敵に影響の少ない農薬を使用する。ただし、ハダニ類が多発生した場合には、効果の高い殺ダニ剤を使用し、一旦確実に密度を下げ、その後は殺ダニ剤や気門封鎖剤を主体とした防除に切り替える。



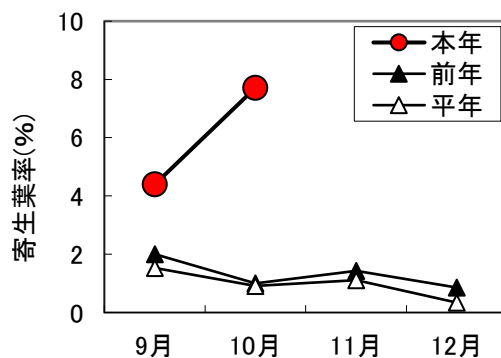
ハダニ類の寄生葉率の推移(イチゴ)
(8-9月:育苗ほ 10-12月:本ほ)

◎冬春果菜類

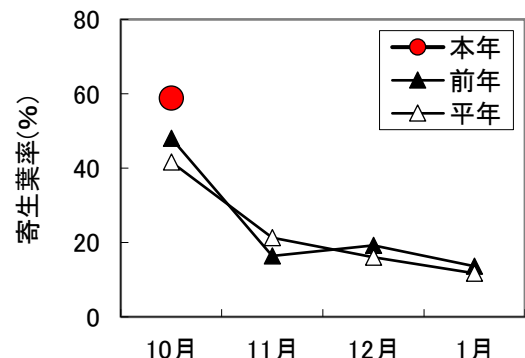
1) コナジラミ類

(1) 発生量：多

(2) 根拠 ア 10月の巡回調査において、冬春トマトでは寄生葉率7.7% (平年0.9%) で平年比多、冬春ナスでは寄生葉率58.8% (平年41.7%) で平年比やや多の発生であった(+)。



コナジラミ類の寄生葉率の推移
(冬春トマト)



コナジラミ類の寄生葉率の推移
(冬春ナス)

(3) 対策 ア タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、トマト黄化病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する(3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照)。

イ 施設内部の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) アザミウマ類

(1) 発生量：やや少

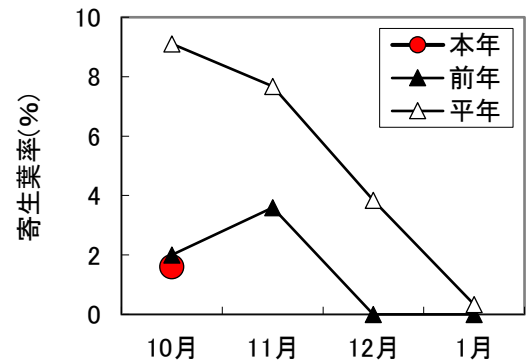
(2) 根拠 ア 10月の巡回調査において、冬春ナスでは寄生葉率1.6%（平年9.1%）で平年比やや少の発生であった（－）。

(3) 対策 ア 施設内ではこれからの時期も発生が認められるため、粘着トラップを設置して早期発見に努め、発生初期の防除を徹底する。なお、粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマ対象の場合は青色を、ミカンキイロアザミウマ対象の場合は青色または黄色を使用する。

イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。

ウ 施設内の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



アザミウマ類の寄生率の推移
(冬春ナス)

◎野菜類全般

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 10月の巡回調査において、イチゴでは寄生株率12.3%（平年3.1%）で平年比多、ナスでは寄生株率0.8%（平年0.8%）で平年並、トマトでは寄生株は確認されず（寄生株率平年0.2%）で平年並の発生であった（＋）。

イ フェロモントラップによる10月第1半旬～第4半旬の誘殺数は、阿蘇市波野で平年比多、合志市・八代市・阿蘇市一の宮・山都町で平年並であった（±）。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除を行う。

イ 施設栽培では、成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵し、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したらただちに除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

各地域のハスモンヨトウの誘殺状況（10月第1半旬～第5半旬）

市町村名（地域名）	本年	平年値	平年比（%）
合志市（栄）	1,655.0	2,112.1	78.4
八代市（鏡）	1,583.7	1,700.7	93.1
阿蘇市（一の宮）	644.0	689.1	93.5
山都町（鶴ヶ田）	51.6	61.8	83.4
阿蘇市（波野）	178.4	76.6	232.9

単位：頭、平年比（%）：（本年誘殺数／平年値）×100



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<http://www.jpnp.ne.jp/kumamoto/>

3 防除のポイント等

茶のマシン油乳剤による越冬期防除について

越冬期のマシン油乳剤散布は、チャトゲコナジラミとハダニ類への防除効果が高いため、発生園では対策を徹底しましょう。

- ①越冬期のマシン油散布を11月～2月上旬に行う。
- ②古葉に多く寄生しているため、薬剤散布前に整枝やすそ刈りを行うとともに、すそ葉の葉裏にも葉液が充分にかかるよう、すそ部から茶株頂上部に向けて斜め上方向に散布する。
- ③マシン油散布は赤焼病の発生を助長するので、赤焼病の常発園では散布を控える。

カンキツのマシン油乳剤による越冬期防除について

本年は秋期のミカンハダニ及びカイガラムシ類の発生が多い傾向にあることから、園内の越冬量が多いことが予想されます。越冬期のマシン油乳剤散布は、ハダニ類とカイガラムシ類（ロウムシ類を除く）への防除効果が高いため、発生が多かった園を中心に対策を徹底しましょう。

- ① 越冬期のマシン油散布（12月下旬～1月中旬）により初期密度を抑制しましょう。ただし、樹勢が弱い樹への散布や厳寒期での散布は落葉を助長する恐れがあるため、散布を控えましょう。
- ② カイガラムシ類は枝葉の混みあった所に多発するため、せん定、整枝、間伐を行い通風・採光を改善しましょう。



野菜のウイルス病まん延を防止しましょう

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これらの微小害虫は、気温が高い時期に活発に活動します。これから定植を行う作型では、育苗期や定植直後がウイルスに感染するリスクが高まる時期です。そこで、以下の対策を必ず行いましょう。

1 保毒虫を栽培ほ場に「入れない」対策

上記のウイルス病は、微小害虫がいなければ感染拡大しません。これからの時期は、微小害虫の施設内への飛び込みは大きく減少しますが、できる限り施設内に入れないようにしましょう。

- (1) サイド開口部は目合い0.4mm（アザミウマ対策の場合は目合い1mm以下）防虫ネット、谷換気部は、目合い1mm以下の防虫ネットで被覆する。また、被覆ビニルや防虫ネットに破損や隙間が無い点検を行い、必要に応じて補修する。
- (2) ハウス周辺に雑草および野良生えが残っていると、微小害虫が飛び込みやすくなるため定植10日前までに除去する。

2 保毒虫を「増やさない」対策

施設内での感染拡大を防ぐため、野外から侵入した微小害虫を増やさないようにしましょう。また、施設内での発病を抑えることで、栽培終了後に保毒虫が野外へ飛び出す危険性を減らしましょう。

- (1) ハウス内に粘着トラップを設置し、侵入した害虫の密度を低下させる。
- (2) 施設内の雑草は、微小害虫の増殖源となるので徹底除去する。
- (3) 冬春トマトでは、野外からのコナジラミ類の飛び込みがほぼ無くなる時期（11月）に成虫に効果のある薬剤で防除を行う（令和2年度技術情報第17号「タバココナジラミバイオタイプQ成虫の薬剤感受性検定の結果」（http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/R2/yosatu/210310gi_jyutu.pdf）を参照）。
- (4) 発病株は二次伝染源となるので、見つけ次第直ちに施設外に持ち出し処分する。
- (5) ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスを保毒するため、微小害虫の防除を継続して行う。



Ⅲ 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
カンキツ	緑かび病 (貯蔵病害)	並	防除員報告では、平年並～少(－)。 収穫時には、果実表面に傷が付かないよう注意し、収穫当日は選果をしない。また、入庫前は必ず予措を行う。
冬春 トマト	葉かび病	並	巡回調査では平年並(±)。 除去した病葉は、直ちにほ場の外へ持ち出す。
冬春トマ ト・冬春 ナス	灰色かび病	並	巡回調査ではトマト・ナスで平年並(±)。 除去した病葉や果実は、直ちにほ場の外へ持ち出す。
秋メロン	べと病	並	防除員報告は平年並～少(±)。 除去した病葉は、直ちにほ場の外へ持ち出す。
野菜全般	アブラムシ類	並	巡回調査ではイチゴで平年比やや多、トマトで平年並(±)。 発生を確認したら、直ちに薬剤防除を行う
【野菜病害虫の共通対策事項】 <ul style="list-style-type: none"> ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。 			

Ⅳ その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病害虫防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室)
(TEL: 096-248-6490) にお問い合わせ下さい。

※なお、本文及び各種トラップのデータ等はホームページ「<http://www.jpnn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<http://www.jpnn.ne.jp/kumamoto/>」